

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 27 日現在

機関番号：25406

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24792459

研究課題名(和文)造血幹細胞移植後患者のライフコントロールについての研究

研究課題名(英文)Life control in patients receiving outpatient care for hematopoietic stem cell transplantation

研究代表者

永井 庸央(Nagai, Tsuneo)

県立広島大学・保健福祉学部・助教

研究者番号：70433381

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は外来通院する造血幹細胞移植後患者のライフコントロールはどのようなものなのかを明らかにすることを目的とした。研究デザインは質的記述的研究であり、データ収集方法は半構成的面接法を行い、分析は現象学的方法を用いた。

対象者である18名の患者を分析した結果、患者のライフコントロールとして【これからの生活に目安をつける】【他者との隔たりのなかで生活する】【生活していくために気持ちの均衡を保つ】【病気になる前の自分でいようとする】の4つの大テーマを見出した。患者のライフコントロールは、患者が不確かな状況を理解したうえで、これからの生活がどうなるのかを予測していたことが特徴的であった。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to elucidate the life control of patients receiving outpatient care after receiving hematopoietic stem cell transplantation. This study used a qualitative descriptive design. Data were collected through semi-structured interviews. The analysis was conducted using Giorgi's descriptive phenomenological study as a reference. The subjects were 18 patients. Four major themes were conducted regarding the life control of the patients: "putting a measure on the life ahead", "living with distance between others", "maintaining emotional balance in order to live" and "trying to be the self before becoming sick. The main finding of this study is that the patients predict how life will be while acknowledging the difficulty of being unable to predict the occurrence of graft-versus-host disease or relapse.

研究分野：がん看護

キーワード：ライフコントロール 造血幹細胞移植

1. 研究開始当初の背景

造血幹細胞移植は血液・造血器腫瘍患者の治療法として1970年代から開始され、著しく移植件数は増加している。造血幹細胞移植後の患者は造血能の回復が十分でないことや、免疫抑制の内服に伴い免疫能が低い状態にあることから、患者の療養生活は死の脅威にさらされている。そして患者は情報を集め判断し、それをもとに自分なりに生活を厳しく制限して細心の注意を払い、生活していることが知られている。

しかし、このような状況を患者がどのように捉えているかは十分に明らかにされていない。そこで、この現象を理解するために、ライフコントロールの概念を用いることが有用であると考えた。文献検討を通して、ライフコントロールは造血幹細胞移植後患者が免疫機能の低下と死の脅威により、生存するという信念を抱き病状の現実を受けとめ、病気、治療の情報を整理し、自分の活動または感情を抑制し、自らの生活の軌跡と範囲を選択する能力をもち実行することと捉え、本研究を行なうことにした。

2. 研究の目的

外来通院する造血幹細胞移植後患者のライフコントロールはどのようなものなのかを明らかにし、移植後に外来通院をする患者のライフコントロールを促す看護の示唆を得ることである。

3. 研究の方法

研究デザインは、現象学を基盤とする質的記述的研究である。対象者は造血幹細胞移植後おおそ1年以内の外来通院患者であった。データ収集方法はプレテストを実施して、インタビューガイドを作成し、30～60分以内/回の半構成的面接を1人につき1回～2回行った。データ収集期間は2012年8月～2013年3月であり、データ収集場所はA県立がんセンターであった。分析はジオルジの記述的現象学的方法を参

考に行い、分析の信憑性と信用可能性を高めるために、定期的に指導教員から指導を受けた。倫理的配慮として、高知県立大学看護研究倫理審査委員会の承認を得た後、協力施設の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

結果

研究対象者は18人で、男性11名、女性7名、平均年齢は43歳(20～60歳代)であった。1回の平均面接時間は約45分(25～82分)で、研究対象者の平均面接時間は約64分(25分-107分)であった。また、移植後経過期間は平均8カ月(3～14カ月)であった。

患者のライフコントロールとして【これからの生活に目安をつける】**【**他者との隔たりのなかで生活する**】**生活していくために気持ちの均衡を保つ**【**病気になる前の自分でいようとする**】**の4つの大テーマ、6つの中テーマ<>、21のテーマを見出した。

【これからの生活に目安をつける】は患者が入院している間に、移植を受けた経験や、弱った身体を実感することから、重症感染症による状態悪化への強い危機感を持ち、医師の指示を固く守り生存しようとする。それと同時にどのように注意して具体的に生活してよいのかわからない不安から、情報を集め、具体的な生活の仕方を理解し、先を見越して慎重に生活することであった。また【これからの生活に目安をつける】には<体調の悪化を回避する><現状を維持する><脆弱な身体を日常の生活に順応させる>の中テーマが含まれていた。

【他者との隔たりのなかで生活する】は、患者が家族にこれ以上迷惑をかけないように心がけながらも、弱く変わりやすい体調により家庭や職場で求められる役割を担えない困難をもつことで他者との間に隔たりを感じ、わだかまりを我慢し、自分なりに

他者と共に生活することであった。また、【他者との隔たりのなかで生活する】には<これ以上家族の迷惑にならないようにする><他者との隔たりに持ちこたえる><苦悩のなかの対応策を選択する>の中テーマが含まれていた。

【生活していくために気持ちの均衡を保つ】は、患者が厳しい予後を生きる状況で、気持ちのバランスをとるために強い信念を持ち、これからの経過を考え込まず楽しみ、生活することであった。

【病気になる前の自分でいようとする】は患者が入院生活から療養生活に戻り、病気になる前の自分とのギャップに困惑する状況で、他者に病人として見られることを避け、失った機能を取り戻し、本来の自分でいようとするのであった。

外来通院する造血幹細胞移植後患者のライフコントロールは、患者が免疫能の低下により強い危機感を持つことで<生き延びるために医師の指示を固守(する)>など<体調の悪化を回避する>ことであった。そして自らの状況を注意深く見て[少しずつ回復しているため今は無理をしない]など<現状を維持(する)>し、[細菌に身体を慣れさせる]など<脆弱な身体を日常生活に順応させ(る)>、【これからの生活に目安をつける】ことであった。さらに、患者が[これ以上家族の迷惑にならないように(する)]試み、脆弱な身体についての他者との認識のずれにより[辛さをわかってくれない家族へのイライラを我慢する]など<他者との隔たりに持ちこたえ(る)>ながら、[移植患者同士で本音の愚痴を言う]など、自分なりに<苦悩のなかの対応策を選択(する)>し、【他者との隔たりのなかで生活する】ことであった。また、患者が再発する可能性について常に意識して生活する状況で[厳しい予後を考え込まない]ようにするなど【生活していくために気持ちの均衡を保

つ】ことであった。加えて、患者が顕著な身体の変化や役割を果たせない困難から[なくした機能をひとつずつ取り戻(す)]し、【病気になる前の自分でいようとする】ことであった。

考察

造血幹細胞移植後患者のライフコントロールは、患者がGVHD、再発などによる不確かで予測が困難な状況を理解したうえで、“先”の生活がどうなるのかを予測していたことが最も特徴的であったと考える。また、患者が他者との隔たりに受け入れ、“今”の関係性を重要視していたことにも特徴があったと考える。そして患者が気持ちの安定を保つために自分なりの手立てを持ちながら“今”の生活に価値を見出し、さらに本来の自分を取り戻し、新しい生活を営むことを目指していたことも特徴的であったと考える。

本研究で明らかになったライフコントロールを支える看護実践として、看護師は退院前より療養生活をイメージできるように具体的な情報を患者に提供し、そして家族の病状の理解を促すことで患者との相互理解を深め、さらに患者のこれからのきがかりな気持ちを理解して患者が生活を再構築できるように関わる必要性が示唆された。

結論

本研究は、外来通院する造血幹細胞移植後患者のライフコントロールはどのようなものなのか明らかにすることを目的に18名の患者を対象に半構成的面接を行った。データ分析にはジョルジの記述的現象学的アプローチを参考に行った。

その結果、造血幹細胞移植後患者のライフコントロールの最も特徴的な点は、【これからの生活に目安をつける】であり、これまでのライフコントロールに関する研究で

は言及されていなかった点であった。すなわち、患者は先行きがどうなるのかはっきりしない不確かな状況の中でもおおよそを予測し、どうすれば良いのか考えていたことが特徴的であり、新しい知見であった。

研究者番号：

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 2 件)

17th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) でポスター発表

The Asian Oncology Nursing Society(AONS)2015 conference 発表予定

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

永井庸央()

研究者番号：70433381

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()